1P113

環境や時代の変化に即したピアサポート活動の役割と課題

下村 美紀、本田 睦子、福島 慎吾

認定NPO法人　難病のこども支援全国ネットワーク

【背景と目的】

難病のこども支援全国ネットワーク（難病ネット）では病院内に窓口を設けて行うピアサポート活動を2005年に開始してから今年で16年目を迎える。病気の種別を問わず、病気の子どもを育てた経験のある親が、病気のこどもとその家族を支援する活動で、こども病院や小児科病棟の一画に２名が待機し、予約なしに対面にてお話を伺うサポートをしてきた。2020年２月から新型コロナウイルス感染拡大防止のため窓口での活動を休止している。閉室は活動開始以来初めてのことである。ピアサポートの重要性を認識されつつある今日、コロナ禍においては社会全体的に精神的な不安が増大することが懸念されている。今後、感染拡大予防の観点から対面での活動制限が継続されることが予想される。窓口再開の目途が立たない中、2020年９月より電話によるピアサポート（電話ピア）を開始した。ピアサポーターの役割と、電話ピアの問題点や改善点などの今後の課題を検討し、今後長く続くであろうコロナ禍であっても病気のこどもを育てる親たちのサポートを充実させるためのあり方を明らかにする。

【方法】

難病ネット事務局に拠点を設け、ピアサポーター２名が電話ピアを行う。毎週火・金の週２回、受付時間11 ～ 15時とし、担当者の移動時間が交通機関の混雑時となるのを避ける。各拠点の窓口に電話番号を掲示。機関紙、SNS等で告知を行う。ピア室直通電話の番号を事務局へ転送する。担当者の感染予防に留意。手指の消毒、室内の消毒、換気などを徹底し活動を実施する。東京都の活動件数にて検証する。

【結果】

2020年９月より開始した電話ピアへの相談件数は９～２月の６か月間で17件／ 47日であった。前年度同月の相談件数と比較すると都全体では133件／ 153日であった。掲示された番号を控えて開始時間を待っていたという声もあった。

【考察】

ピアサポートは病院内にあり気軽に立ち寄れることが重要であるとされてきた。コロナ禍では感染予防が優先され雑談の機会すら減少していることが問題となっており、話ができる場が重要であることが再認識されている。非言語的コミュニケーションが多く用いられる支援であるため、電話だけでなくビデオ通話を併用する方法や、時代に即したLINEを使用することも課題である。窓口の利用を絶たれたピアを必要としている親たちへまず受け皿となる情報を届けることを継続していく。

1P114

出産から就学後の気持ちの変容プロセスに関する1事例の検討－わが子の発達が気になる母親へのインタビューを通して－

佐々木 沙和子[1]、星山 麻木[2]

[1]帝京大学
[2]明星大学

【問題の所在】

発達障がい等の特性がある児の保護者が抱えるストレス及びメンタルヘルスケアが重要とされている。また、早期からの幼児とその保護者への支援は長期的な効果へとつながることも示されている。そこで、本研究では出産前から就学後の気持ちの変容プロセスに関する母親の語りをもとに、わが子の発達が気になる母親への支援の在り方を検討することを目的とする。

【方法】

調査対象者は、わが子の発達が気になる母親1名である。調査時点で児は小学5年生で、4・5歳頃に多動傾向と自閉症スペクトラムの疑いの診断を受けたが、生活の安定に伴い、調査時点では医療機関とのつながりは終了している。2018年8月に半構造化インタビューによる聞き取りを行い、同意の上でICレコーダに録音した。得られたデータは逐語録化を行い、語りの全体的な内容を把握するために、KHCoderを用いてテキストマイニングによる分析を行い、適宜エピソードも補足しながら分析を進めた。

【倫理的配慮】

本研究は、明星大学倫理審査委員会にて承認済み（H30-008）である。本調査を実施するにあたり、過去の語りも調査対象とすることから、児が通っていた幼稚園の園長と調査対象者に対して口頭と書面で説明の上、同意を得た。利益相反はない。

【結果】

保護者は、児の出産前から現在（小学5年生）に至るまで、母親自身が児の発達に関してどのような気持ちの変化を辿ったかについて語られた。その中で、母親は自分自身と児の生活の折り合いをつけながら児の発達について理解を深めていき、幼稚園入園後に児の気持ちへの理解も深まったことが分かった。さらに、就学後は児の発達について担任教員から理解が得られず児の気持ちが不安定になった時期があったが、母親は児と担任教員のそれぞれの気持ちの違いや特性の違いに気づきつつ、児と担任教員の調整役を担い始めたことを語った。加えて、わが子の発達について悩んでいる周囲の保護者の姿をもとに、周囲との関係性の作り方について実践をもとに語っていた。

【考察】

母親の気持ちが変容した背景として、友人や保育者と気持ちを共有したことや、母親自身が児の発達について学ぶ過程で児を理解し、児と担任教員との調整役も担っていたことを語った。母親一人一人が抱く乳幼児の発達に関する受け止め方や対応の仕方に合わせた、周辺環境とのつながりと保護者の個別性を重視した支援が必要であると推察した。

Presented by Medical*Online